

次官

次官

主管政務局 中田

電受第二六號 光緒二十九年四月廿一日午後三時五十分

陸軍大臣 藤原

朝鮮政府の同の当塔に碇泊スルケニキ號ヲサ、
法用船トナシキ事ハ之日入港ノ玄海丸(オカイワル)ヨ
リ来ルヘキ役人ヲ乗セ直チニ浦塩ニ向ルヲ苦但し
帰路ハ通常ノ航路ヲ執ルノ預定ナリト云フ

*成時運船二名ハ玄海丸ニ乗リ去リ云々
ヲ科金銀等ニ云々

外務省

大臣

大

次官



主管

波留局



電受第六七號 廿九年四月廿一日 午後二時五分 釜山 撥

陸軍大臣

仁川

秋原領事官補

朝鮮政府ハ新ニ募リタル工兵隊ニ學スル銃器ノ露
國ヨリ借入ル、契約ヲ爲シタルモノカ、未ルニ十日当地出
帆、言海丸ニテ右請取員、ソ補塩野從、派遣スル
由

外務省

明治九年四月廿二日起
同世九年四月廿三日發清

主付

政務局長中田

次官



親展

在南海所傳

二橋智島子坊官殿

原外如次友

於解政者、鏡吾受不負南海所傳、

沙老、件、

於解政者、新々、暮リ先工兵隊ニ要ス、鏡吾

外務省

第六號

ヲ露國ヨリ借入ル、契約ヲ為シ先モカカ渡不負

ヲ南朝所傳、沙老、由又カ渡不負、仁門ヨリ去

海カテ、釜山ニ至リ口港ニ於テ、^{コト}果敢ニ以テ夜

ノ懸蓋号ニ乗込、本日もテ直テ、南海所傳

一登向、沙老、仁門、直テ、南海所傳

定、沙老、仁門、直テ、南海所傳

沙老、仁門、直テ、南海所傳

浄書部 整理 原

次官

大臣

電受第二九八號 壬午年四月廿三日 右。時 幸分 察 一 時 幸分 察

電信課長
主管政務局 田

陸奥外務大臣

小村公使

軍部官達ゴシロク 外 陸 人 新設三個大隊ニ
用ニル軍若買入方農商工部官吏ハクテツヨウハ
電線材料買入、用向ノ帯ニ一行ハ人仁川ヨリ
玄海丸ニ乗組ニ釜山ニ至リ、口所ヨリ當國汽船頭
益辨ニテ浦朝ニ渡航ノ目的ニテ出發ヤリ依テ
本官ハ在浦朝ニ橋事務官ニ向人等ノ舉動ニ
注意シ委細報告スヘキ旨命シ置ケリ

外務省

明治三十九年四月二十七日接受

機密第一五号明治三十九年四月廿日付仁川港情况續報中打報

牙七、韓政府露國ヨリ武器ヲ借入レントス、本日大要
 電報セシ如ク先ニ新ニ募集セルニ兵隊使用ノ銃器、殆
 シト全ク欠乏セルカ故ニ新募ニ兵隊、只其名アリテ實用ナ
 カリシカ今回韓政府ニ愈右ニ兵隊使用ノ武器借用ノ事
 ヲ露公使ニ申込ニ其承諾ヲ得タルモノト見ヘ既ニ受取奉
 員ヲ撥定ニシタルニテ日ヨリ港中ハ海丸便ニ投棄ニテ釜山
 ニ至ラシノ更ニ利運社汽船艙益号ニ轉棄シテ浦塩港
 外務省

ニ至リ之ヲ受取り還ラシムル由ナシハ右武器ノ区域ニ到着スルハ
 早クトミ来月中旬ナル可シ去シハ韓政府カ自國兵ヲ以テ
 王宮内閣ヲ十分ニ護衛シ得ルニ正シク此後ニ見可ク從テ國
 王世子ノ還宮モ亦来月中旬以後ニアリト推定シ得可キ事
 原書ニ明治三十九年二月朝鮮國ニ於テ多量後蜂起關係下

題名書類中ニテリ

叢

大臣

電信課長



主任

次官



主管 政務局 中田

電受第三二一

號

明治九年四月廿七

日午七時

分分

着

陸奥外務大臣

仁

陸奥外務大臣

是キ、電報ニシテ武若借リ入ル、おノ、朝鮮政
府ハ、浦州ハ、官吏ヲ派セ、ル、件ハ、有、テ、去、ル
ニ、テ、ハ、農、工、部、主、事、キ、ン、ホ、ケ、イ、外、ニ、名、廿、五、日
陸、軍、フ、ク、イ、チ、ヨ、ウ、シ、ン、ワ、外、ニ、名、有、テ、主、官、ト、書
ニ、ハ、書、キ、セ、リ

外務省

陸軍省
川本金蔵中尉送長

次官



廿九年五月六日接受

官政務局
中田

機密第一八五号

朝鮮官吏頭益号三浦潮行ノ件

豫テ機密第一三三号ヲ以テ西内報及置候頭益号
浦潮行ノ儀ニ付内閣ノ所ニ據ルニ業農乃工部大臣ハ
左仁川橋本勤那多社五配人一家ノ別紙写、如キ會令
書同ノ考シムニ趣又便業者、端負ハ六右ニシテ農商工
部主事金弘洙、全、白詰鑄、軍部主事權鍾録、全、
預信和、全、李洪錫、美ニ行者老右、由、内、金、白、雨、農、乃
工部主事、今、交、京城、ヨリ、浦、潮、新、德、ニ、達、シ、電、線、架、設
用、材、料、ヲ、呈、取、リ、熟、取、積、込、ニ、シ、テ、或、ハ、該、線、路、ヲ、踏、查、シ、
朝鮮ノ内閣、スル、シ、リ、又、權、錫、李、ノ、三、軍、部、主、事、ハ
豫テ借入、約成、ル、ニ、工、兵、隊、所、用、ノ、銃、器、等、取、ル、ノ、ト、申
ス、ト、ニ、有、三、候、全、大、事、ハ、昨、朝、入、港、駐、河、九、便、ヲ、以、テ、為、港
一、到、着、該、候、ニ、付、即、チ、先、着、金、白、雨、主、事、共、昨、日、浦
潮、一、向、々、出、發、直、航、シ、ニ、付、チ、為、力、申、答、考、々、具、報、候
致、具、

在朝鮮國釜山港日本領事館

明治二十九年四月廿八日

在釜山

領事事務官、代理 坂田重次郎



外務大臣 伯爵 陸奥宗光 殿

厚

運啓者敝部必負擬於本月二十日自仁洪後玄海丸
駛往釜洪而顯益船十九日可抵釜洪云使之駐泊幾日
以待玄海丸到着移搭直往海參崴該負回期若
不費多日可順便搭速若至曠時與該負証期後
任便駛行他洪運輸屆期速到海參崴運載物由
一同該負搭速若或該地有順回船隻可以搭客者
與敝部負另商妥定不必久稽航期要在臨時裁
量以此

照亮妥辦可也

遼陽元年四月十三日

農商工部大臣兼稷頻

楠本武俊貴下

再搭負多少船等而下預難揣度當臨時更陳

也

日本郵船株式會社

明治二十九年五月七日達濟

記録課長

廿九年五月六日達濟

明治二十九年五月七日達濟
同日發遣

主任

政務局長

中田

送第一〇三號

大山陸軍大臣宛 外務大臣

銃器買入ノ為ノ朝鮮國軍部主事浦潮港へ

少將ノ為ニ関シテハ日英ニ及南通知置丹慶尚

右ノ一行ニ付別紙ノ通在釜山坂田領事館

外務省

事務代理ヨリ報告致来ル者右字及少送付

也

明治二十九年五月七日通濟

記録部長



32

明治二十九年五月廿六日

同 年 五月 廿六 日 起 草

日 發 遣

廿九年五月六日

主任

政務局長

中田

中切

川上陸軍中將殿

陸奥宗之

拜啓陳兵銃器買入、為ノ朝鮮國軍部

主事浦潮港ハ出資、多シ、聞シテハ過日及

由通知置テ慶尚右ノ一行ニ別紙ノ通

外務省

在釜山坂田領事館事務代理ヨリ報告致

来ルヨリ 右字差進テ敬具

陸軍省
陸軍部
陸軍部

大臣
陸軍大臣

電信課長

主任

次官

主管政務局
中田

電受第三四〇 號
明治九年五月七日
日午四時五分
着 發

陸奥赤松大臣

萩原領事館

暹羅ニ電報シタル武若借入ノ浦潮港ヘ向テ
 消息シタル官内ニ事^{キニラクゲン} 陸軍^{フク備}
 信和^{シク}同シク^{コシヨウロク}及^{ハクテ}郵遞局^{ニ事}ハクテ^ホ
 ンコウ^ニ五名^ハ也^ノ 顯益^ニ 歸仁^セ
 ニ付キ直チニ事情偵察セシメタル零回船
 浦潮斯位ニ着スルヤ直チニ要路兵士官端艇
 二艘ヲ小艇浮^ニ引キ来^ル大箱百五十一個
 外務省
 小箱五百四十一個ヲ積込メ右ニ多分銃砲及
 彈藥ナシ該區横込^ノ際ハ要路偵察官
 為張シテ船員ノ外日本人ノ世来ヲ許サ^レ

明治九年五月十八日
起首
八日發清

政務局長 中田

主任

海軍省 陸軍省

(奉加)

親展 川上中侍殿 陸軍省宛

拝啓 陸軍省 皇朝政府の清瀬港の回航

命令の頭蓋非歸仁并積荷等義國

に在朝鮮國十村王使并に在仁川駐在領事館

外務省

事務代理より別紙西通の通報書有之候

同右寫差近直致具

別紙 十村王使并に在仁川駐在領事館
事務代理より 三十一日

大
藤
了

電信課長

主任

次官

主管政務局
中田

電受第三四六號
明治三十二年五月九日
日午五時五分
着 發

陸奥外務大臣

森島富雄事務次長

浦朝より積ミ未リシハ
統者及彈栗ハ本日京
城へ廻送ヤリ
統者ノ姓ハニク
姓ラ下ラザルシ

外務省

5-0145

0313

陸軍省
陸軍部

大 塚 了

電信課長

主任

次官

主管政務局中田

電受第三四七 號 明治九年五月九日 午後八時五分 着 發

陸奥外務大臣

陸奥外務大臣

浦朝ヨリ積と来リタル銃着ノ數ヲ詳細ニ取調ヘタ
ルニバハタニ銃三千挺彈藥ニ于テ外ニ電信着
械三個ニテ軍部ニテハ受取方ヲ非テ急ニ急ニ店
ル由

外務省

第五五號

明治廿九年五月十一日起草
同廿九年五月十一日發遣



主任

政務局長 中田

陸軍外務省

親展

大山陸軍大臣殿

令回南洋諸島之頭蓋錫之積之米之元

銃器及彈藥之數等之義序在仁川

余領事館事務代理之別紙之通報書有

外務省

之傳回右寫美近傳也

別紙之通報書
雷凌第三四七二一四

淨書部 總務課

明治廿九年五月十一日起草
同廿九年五月十一日發遣

主任

政務局長 中田

(奉記)

陸奥電報

親展 川上中傳殿

特陪陳者全圖浦潮港より 陸奥電報

積り来り先 鏡器及 彈藥の 數等ノ 義

在仁川 兵隊 領事館 事務代理 報告

外務省

出有之 同左 可 長 府 復 強 具

(別命) 陸奥電報 奉記 第三 包 七 号 (同)

政務局中田

廿九年五月十三日接獲 主官 通商局

大臣

機密第二二二號

頭益号朝鮮政府御用船トナリ浦塩直航
并ニ元山電線延長ノ件

次官

我郵船會社代官利運社汽船頭益号ハ這回釜山
ニ於テ俄カニ朝鮮政府ノ御用船トナリ本月二十二
日同港入港ノ旨海丸ヨリ来リシ朝士白詰錦金弘珠
農商工部 權鐘録、趙信和、軍部官吏 李法錫、冥四府官
皆吏ト云フ

ノ五名ト外ニテ株電總會社員一名ヲ乘セ翌二十三
日浦塩一向リ直航セシ由其用務ハ京元間鐵道敷設ニ
關スル事ト云ヒ或ハ京元間電線修理ノ上元山ヨリ露

境迄延長ノ事ナリト云ヒ又一説ニハ今度京城ニ於テ
工兵ヲ募集スルニ付可容ノ兵器豫メ露國公使トノ
内約ニ依リ受取ノ為メナリトモ云ヒ右孰レカ事實ニ有

號九二五第受機密

在朝鮮國元山港

日本領事館

之候哉吾地ニ於テハ容易ニ窺ヒ知ルコトヲ得ス候ハ共
抑亦元山ヨリ咸興 約我三十里 迄電線ヲ延長シ他日朝

露電線ヲ接續セシメ又浦塩元山間鐵道ヲ布設シ
終ニ西伯利亞鐵道ニ連續セシムルノ議ハ今ヨリ數年前

ニ起リ殊ニ咸興迄電線延長ノ儀ハ曩ニ京元間電
線架設ノ際已ニ其筋ニ於テ決定シ必要ノ材料ハ亦

ヨリ各地朝鮮電氣局ニ藏置有之孤豫ハ爾及屆候
此レ其後一向着子ノ運ヒニ至ラヌハ處昨午八月十

日迄知事上京ノ際右延長ノ前議ヲ再提シ竟ニ政
府ノ認容ヲ得テ歸元爾後如何ナル談合ニヨリテカ必要

ノ材料不足分シ中川等備隊長ヨリ供給スルコトニ相成電
線其他機械等 此以全氣中七百四餘ニテ内二千四百ハ本年二月

頃日探聴セリ 最早大概到着致シ路リ電桿モ永興ヨリ

約我十邊近配置之將之建設セトスル之際は南部暴徒
蜂起し延て北部亦不穩ノ状ヲ呈シタルヨリ其際ハ
露隊ハ北部沿岸最早大抵測量ソリテハハ威ハ
不電線延長ニ着手スルノ計畫ニハアラル歟トモ疑
考テ尚事案抑知ニ從テ御報可申テ以去不取
不御参考近具報テ致具

明治廿九年四月三十日

右元山

二等領事 二口美久

外務次官 原敬殿

追々本文白詰録ハ白吉鑑ナリトモ云フ



在朝鮮國元山港

日本領事館

大臣

電信課長

主任

次官



主管



電報第二二一

號

明治廿九年五月

十六日午四時十分

發着

小村公使

陸奥外務大臣

近頃朝鮮政府カ多数ノ銃ヲ露國ヨリ輸入シタ
 ル趣ナルガ右ハ朝鮮ニテ新タニ兵隊ヲ組織シ之
 ヲ名トシテ他國ニ向テ撤兵ヲ請求セントスル下タ心
 アルニハ善之ヲ精々探訪ノ上時様ヲ誤ラス報
 告アルベシ

外務省

大臣閣下

次官閣下

電信課長

主管 政務局 中田

主任

電受第三八四號 明治九年五月二十三日 午後一時三十分 着 發

清島支那事務 少村公使

此は浦湖より到着せし銃着三千挺は、曩キ
モ重箱せしもの射及銃術大隊ニ充用ス
ハキ目的ありて、從來、親戚隊(日訓練隊)
隊の存に信用なきもの王官軍備、任務
ヲ視らしむるは、依テ日清戦争より更ニ
細大隊ヲ編成シテラシテ王官軍備ノ任
務ニ當ラシメント、計畫ニシテ揚兵要求準
備ニテラシメント明白ナリ

外務省

揚兵ノコトハ二月十日奉旨後向ニテ申込奉リ
タシテ當方ニテ拒絶シタレバ、運入ノコトナリ
目下トテハ日清戦争ノ後、以テ村部内ニ起
居ニテラシメント、拒絶ス

明治廿九年五月十八日起草
同廿九年五月十八日發遣

主任

中田

政務局長 中田

次官



親展

大山陸軍大臣 陸軍省大臣

陸軍省親衛隊(回訓練隊)の現政務省信用を

以て王宮護衛隊に編成し之を王宮護衛

隊より更に三個大隊に編成し之を王宮護衛

外務省

に編成し之を王宮護衛隊に編成し之を王宮護衛

隊に編成し之を王宮護衛隊に編成し之を王宮護衛

隊に編成し之を王宮護衛隊に編成し之を王宮護衛

隊に編成し之を王宮護衛隊に編成し之を王宮護衛

第六五號

附上申付
不式切手
但書文

機密号外

別紙之通り在京城之使、電報之北内密及
傳き其承り

明治九年四月廿二日

在釜山

一等領事加藤増雄

在浦津

貿易事務友二橋海蔵

別紙

在京城小村使より、暗号電行譯

浦津港行郵、鮮人、名、玄海丸、釜山、リキ夫より
顯益紳、來、浦津、行、結、其、利、向、多、分、統、計、也

在浦潮港日本貿易事務館

買入、為、ラ、ト、事、ナ、リ、同、人、等、奉、勅、採、集、シ、テ、十、分、注、意、ス

シテ、委、ト、モ、被、告、相、取、ル、ヲ、シ

明治九年四月廿二日午後一時三十分、京城發

小村公使

二橋貿易事務友宛

五月二十日接受

一機密第一七号明治三十年五月内務省行港情况續報中抄録

六、露國ヨリ借入シタル兵器件、当國政府ニ新ニ募リタル

工兵隊ニ供スル銃器彈藥ヲ露國政府ヨリ借受クル事ニ決

シ四月二十五日当港出帆、筑後川丸便ニテ陸軍副尉趙信和

権鐘録、宮内主事金洛鉉、三名ヲ釜山ニ向ヒシノ前ニ今月二十

日ニ玄海丸便ニテ釜山ニ向ヒタル農商工部技師白結鏞外五

名ト合シテ利運社汽船艤益号ヲ市用船トシテ之ニ投棄

シテ浦潮港ニ至リ目的、銃器ヲ投載シテ本月七日午右

外務省

七時当港ニ帰航セリ銃器ハ、バルクン式ニシテ其数三千四十枚

彈藥六十万発外ニ電信器械三箇アリ今日五時日ヲ以テ

漢江ヲ控テ釜山ニテ輸送シタリ

原書、明治三十年二月朝鮮国界誌蜂起空傳ニリ

大澤

次官

飛

第三八二號

廿九年六月十三日接獲

主管 政務局

中田

秘發第一七二五号

朝鮮國京城元山間電線ヲ慶興府迄延張
 シ露國西比利亞電線ヲ延シ同町ニテ兩國
 電線接續スルノ計畫有之我ノ風説有
 之趣仁川郵便局長ヨリ内報ニ接シ其處
 若シ右風説ノ如ク兩國電線ヲ接續スルト
 キハ明治十六年三月議訂本邦朝鮮國
 海底電線條款第二條及第三條ニ違反
 スル義ニ付其向ニ於テ豫テ注意ス様御
 取計相成度此段及御照會矣也

明治廿九年六月十三日

通信大臣 白根 專



外務大臣 侯爵 西園寺公望 殿

陸軍省
逕信者
通商局

大臣

次官

第九七二號

廿九年七月九日接登

主官 中田

通商局

機密第二五號

京元間電線延長ノ件

我郵船會社代官利運社汽船顯益難カ如年
四月下旬俄然釜山ニ於テ當國政府所用船トナリ朝
士數名ヲ多ク浦監斯德一直航セシ件ニ案シ其時尙
以テ具報仕置キ其後該船用向ニ同信開列諸説
中ニタル我若者取ルノ為ナル事ニ判然シ彼電線一條
ニ其害存石不カク及朝士一行中農商工部主事
白結鑄ハ數口ヲ浦潮野港ヨリ陸路者五元山ニ來リ朝
鮮電報局内ニ投宿セシトヲ探知セシ付同人ニ就キ所
説ヲ聽ク「自分ハ架設線路實視ノ為ニ陸路入元者
架設費用ハ露國政府ヨリ借入、約束シテ其金額

在朝鮮國元山港

日本領事館

ハ架完ノ上計算ハ若ナリ「元山京博間ノ電線全通ハ
旧八月後ナラシ「今度元山平壤間ニ電線架設ノ事
京博義州間電線ニ昨今修理者ナリナラシ「云々其他
諸端如何ニモ現在京元間電線ヲ露韓通商地タル
慶興府迄延長シ露國ハ西北比利亞電線ヲ延キ來リ日地
ニ於テ兩線ヲ接續セシメ京元間電線ノ修補ハ若元山
慶興間電線架完ノ上善事ノ計畫ナル様波推考ス
尚且「事案ヲ探究セシト存シ在キ「及白結鑄ハ昨亦一
日表明者遊士帆ノ事案九ニ便系多博ニ向ヒ去發致
考「右所案考占具報ヲ致具

明治廿九年六月廿二日

二番領事 二口美久

外務次官 小村壽吉 殿

日本領事館 印

追テ少々他電報局ニ發見アリシ電線及諸器械類ヲ
昨ヨリ布口に掛テ牛馬五十頭ヲ以テ陽陰街道一向ケ
差送リテ居、即チ其元山下平場會ニ架設、用ニ充
ツルモノナラン歟抄め添テ申進也

左列鮮國元山港

日本領事館

陸軍部 第一七號

陸軍部 第二七號

親展

明治廿九年七月十日起草
同 年 八月 日 發遣

政務局長 中四

外務大臣

大山陸軍大臣宛

(各通)

白根通信大臣宛

京城元山間電線延長、件、別紙、通

在元山二口領事ヨリ報告致来、件、為由、

外務省

考右写及由送付也

(元山領事ヨリ送付)

